

45

済生学舎出身の旧制金沢医科大学学長 須藤憲三に関する新事実

殿崎 正明, 岩崎 一, 志村 俊郎, 唐澤 信安

日本医科大学・医史学教育研究会

はじめに 旧制金沢医科大学の学長となった済生学舎出身の生化学者須藤憲三については、唐澤信安が日本医史学会雑誌44(2), 190-192, 1998に紹介されているが、その後の調査で今まで知られていない須藤憲三が済生学舎で何を教えていたのか、金沢医科大学での研究内容、判明した新事実について略歴と共に述べる。

略歴 明治5年1月10日、山形県東置賜郡赤湯温泉の町人宿「あぶらや」の長男として生まれる。明治19年上京して母方の伯父佐藤精一郎が経営する「東京医学院」に学ぶも精一郎は時の文部大臣森有礼との教育上の意見衝突もあり学校経営が破綻し、須藤憲三は済生学舎に通うこととなり、明治26年4月に済生学舎を卒業し、その9月から明治27年4月まで東京帝国大学医科大学生理学選科で修業し、6月に隈川宗雄教授の助手、明治36年3月講師、明治38年1月助教授となる。明治45年1月ベルリン大学留学、留学中の大正元年12月金沢医学専門学校教授に任ぜられ、大正3年帰国して済生学舎出身の土肥章司皮膚科教授と共に金沢医学専門学校に着任する。

金沢医学専門学校は大正12年に大学へ昇格し、大正13年4月9日高安右人学長の後任として二代目学長となる。

その間、明治34年から済生学舎で生理学、医化学を講義し、済生学舎廃校後の同窓医学講習会では生理学・内科学を、日本医学校の創立時には生理学の講義を担当している。昭和9年1月7日脳溢血で静養中に狭心症を併発して逝去する。

出版・研究業績 執筆した教科書として『醫化學實習：全』（1902年）は、第7版（南江堂、1939年）まで、『食物及栄養概論』（元々堂、1913年）、『小醫化學實習』（東京：瓜生済生館、1916年）は、第27版（南江堂、1959年）まで、『完醫化學的微量測定法』（南江堂、1931年）は第3版（1937年）発行され続けた。

野口英世の同級生、和仁真一（明治31年4月卒）の孫敬一氏宅（国府津）にお伺いした際に、和仁家で唯一残っている済生学舎で当時使われていた教科書として、製本の壊れた形で保存されている須藤憲三著『醫化學實習：全』を見せて頂いた。

金沢医科大学での須藤の研究は、帝国大学時代の動物体における脂質代謝に関して、脂肪から糖は生成しないという結論を隈川宗雄教授と共に導き、「Pavy—隈川—須藤の糖及び脂肪の定量法」として残っているが、さらにビタミンB1の結晶抽出の研究をも行っていたことを示す論文があることを新たに出てきた手紙から確認できた。

人となり 須藤は実験装置を考案する能力に長けており、自らも「実験では世界一」と自負している。また青山胤通が内科の教室で、なにか分からない事があったら「医化学のSutoh君のところへ行って聞きたまえ、あれはエンサイクロペディアだよ」と教室員に言うほど、博学であった。

明治の時代に、東京帝国大学の助教授となること事態極めて稀な事である反面、ドイツ留学中に東京帝国大学の都合で金沢医学専門学校の教授として出され、隈川教授が亡くなった時に東京帝国大学へ教授として戻ってこないかと青山胤通から請われた時、「よろこんで動くようではSutohは死んでしましますが、それでよろしいか」といって普通であれば大栄転の話を辞退したりしている。

まとめ 私立の医学校である済生学舎の出身者として官立医科大学の教授となり、最初に学長を務めた須藤憲三については、現在まで殆ど世に知られる事なく今日に至っている。本報では、その人となりを検証するために最近入手した須藤憲三が書いた2通の手紙等をもとにその偉大な足跡について論じる。